

昔むかし、あるところに、まずしいおばあさんがいました。おばあさんは、みじめおばさんと呼ばれていて、年とつた犬といっしょに暮らしていました。

おばあさんの財産といえは、庭にはえている一本のナシの木だけでした。ところが、秋になってナシが実つてくると、毎日、村のいたずらっ子たちがやってきて、おいしそうにじゅくした実をみんなとつていつてしまいました。そんなことが毎年つづきました。

ある日のこと、おじいさんがひとり、みじめおばさんの家の戸をたたきました。

「わたしははらがへって死にそうだ。どうか、食べ物をめぐんでおくれ」

みじめおばさんは、

「まあ、それはお気のどくに。でも、どうしましょう。うちには、黒パンが半分しかないんですよ。でも、これでいいのなら、おあがりなさい」といいました。おじいさんは、パンを受けとつて、

「あなたは、ほんとうにやさしい心の持ち主だね。おれいに、願いごとをひとつかなえてあげよう」といいました。みじめおばさんは、考えてからいいました。

「そうね。私の願いごとはただひとつ。私のナシの木にさわったものは、みんなびつたり木にくっついて、私のはなしてやるまで、にげられないようにしてほしいんだよ。みんなでナシの実をぬすんでしまつて、それはひどいんですよ」

おじいさんは、

「では、望みどおりにしてあげよう」といつて、どこかへ行つてしまいました。

つぎの日、みじめおばさんはナシの木を見にいきました。すると、木には、男の子や女の子がたくさんくっついてぶら下がっていました。子どもたちをひきはなそうとしたおばあさんたちまでぶら下がっていました。お母さんたちをたすけようとしたお父さんたちまでぶら下がっていました。鳥や犬もぶら下がっています。ナシどろぼうをつかまえに来たおまわりさんまでぶら下がっているではありませんか。

みじめおばさんは、おなかをかかえて大笑いしました。

それから一年のあいだ、子どもや親たちはナシの木にぶら下がったままでした。みんな、もう、ナシの実をぬすむなんて、まっぴらだと思ひました。一年たつと、みじめおばさん

はみんなを木からはなしてやりました。

長い長い年月がたったある日のこと、みじめおばさんの家の戸をたたくものがありました。

「おはいり」と、みじめおばさんは返事をしました。入ってきたのは、死神でした。死神はいいました。

「これこれおばさん。おまえとおまえの犬はもうたつぷり生きてだろう。わたしはおまえたちをむかえにきたんだよ」

みじめおばさんは答えました。

「あんたにつれていかれるのもしかたがないだろうね。わたしももう歳としだからね。でも、うちの中をかたづけしていく前に、ちよつと手伝てつたってほしいことがあるんだよ。あそこのナシの木に実がたくさんなってるだろう。あの実をとってくれないかい。あれは世界じゅうのどこのナシの実よりおいしいんだよ。あんなおいしいナシの実をほうつていくのは、もつたに思わないかい」

そういわれると、死神はナシの実を食べてみたくまりました。そこで、

「それもそうだなあ」といって、木に近寄ちかよると、実をひとつとろうとしました。そのとたん、死神のごつごつした骨ほねのような手が、木にびったりくっついてとれなくなってしまいました。死神は、ナシの木にぶら下がってしまいました。

「そうらごらん、あんたはその木にぶら下がったまま、ひからびるがいいよ」と、みじめおばさんはいいました。

さて、それから世の中はどうなったと思いますか。

もうだれも死なくなつたのです。水の中に落ちても、おぼれて死ぬことはありません。ビールをいっぱい積つんだ馬車にひかれても、ぜんぜん痛いたくありません。首を切つても、生きています。

死神はそうしてまるまる十年間、夏も冬も、風のふく日もあらしの日も、木にぶら下がっていました。けれどもそのうち、みじめおばさんは、死神が気のどくになつて、

「もしあんたが、わたしとうちの犬が好きすなだけ生きられるように約束やくそくしてくれたら、木からはなしてやってもいいよ」といいました。

死神は約束しました。

みじめおばさんは、証拠しやうことしてその約束を紙に書かせてから、死神を木からはなしてやりました。

そういうわけで、人間はまた死ぬようになりました。でも、みじめおばさんとおばさんの犬だけは、この世がつづくかぎり元気で長生きしているということです。

原話：『世界のメルヒェン図書館1』小澤俊夫編訳 ぎょうせい

再話：村上郁

